五元集

元

晋子一世の奇句ハことゝく五元よ
悉くせりといへとも其何る自画し
戯言の句をなしあるハ一汁百扁れ
破吟みハ梅巷の暁振居の昏にう
つるも見さとしてもれたるなと人く
ハこれをもてたやして翁よひめ物
なとゝめ晋家この青纏とよふを
こまろれあまねくさうしめあて
編てまろ一書となさとのく

長笑集五元亭秋書なときこえしろ
集編なわるそれよしの号をやめて
名となむせられけりこれハ延宝にはまり
て宝永に終るその間五元をあらため
まるの故ありしなるに晋子の滅後
にいよつてまれ人の家にありとも見れ
まつしてかつしも正徳より今延享まて
にこれも又五元を縁りさにまてとその名
乃久しくきこえく此集れ世にかくれ
まるやこて国ゆくもくまとく

ちかきころおほん神につかふ大徳のまなひ
古代の物このみて多くふみあつめもとめ
中に此書もこと法にかなひけるまゝにまなひ
家に宝ととめてよのしるへにこめたら
小嬢らくひめんの返連もゆひけつ
漢語をまける宮奴の枕の嵐に称ける
えもいはぬうしろめたさやおもはれさん
たゝそのつらき書肉志とる此後のよの
よのしもは縁を求めてみんするをこふ
めるに大徳らけさる遠よそむかしへの
くるのこゝろとつふやきなかくたかいて
を師をかへてみることゆふいと
たのまれは此書もうれしく得かたやらし
人ふる月のうちかつらのことくきなう
らくあつ王帝もまとよりこれをなほく
先師の妙を顧めあらんと法すふ
あひてもしをこのまゝ称さまことや
この法はふかく極むる人なきくよ吾か
よくさはるよの家かれはすめより
称ひしこゝをかよりてえれとむ

まゆみさしれと彼家にゆかりある
る龍をこのみかりなけきりの
うらうて衣通姫乃庭に七日まて
さゝらしけかし者のこゝろころ
さしすやめてさりけんかゝらしてあさ
つさりすらこひまるひもてかゝれたる
まみの紙と申すをおりかさねに
草稿のやうよ氣しるむの墨八
十八を一冊とせるよのまて昔子れ
手澤今なをうらくゝこゝしられくも

志さりしくもあはれすもめつらしくもまた
ありしのかんさしを得てかへりしこゝちも
うくやとおりふしもおもひ出なくしく今は
しめよりのおねさうへしと櫃よおさめ
ゝかくとこそとふく飛蔵といふゝ筆
をとりて氷の下なる魚を画くゝこ
とくつらをまくへさとうつて梓に
し世の昔子をしたふる人とこゝろ
さしをおなしうし

信かぬ

百萬坊旨原

五元集

延宝　天和
貞享　元禄
宝永

宝晋斎ハ米元章ヵ硯の裏ニ
鐫入たる号にし三升子其硯
を希ふ何人て宝井晋子とし
いつも此号を冒しくりかへりとて
筆すてに述ぬへるをやつて
佐玄龍ヵ額を需てしるりけの

軒葉によりけり
延宝のはじめ桃青門に入し
より宝永の万ゝ歳をよろこぶ
いへるをかきしるしなり

其角

[seal]

五元集

四十の賀し侍へる家にて
御秘蔵に墨をすらせて梅見哉

遊大音寺
んめかゝや乞食の家も覗かるゝ

加州小松観音寺奉納
梅の花旦那を請て庭作り

芭蕉翁のはふりけるあかし
りて絵讃をとしけるに
せめてもの火え柿によんめの花

暁
ちと上に肩をうまてやむめの花

不曲亭
あせを拭月あても梅の匂ひ

こつそりと降のやむ段ハ穀の梅

おつしさく梅のさけ目や梅の花

宰府奉納
守梅乃訪ひわさし野老賣

和心水推敲之句
きらく鳴よめき月みより梅の門

梅津氏　於祖父大坂
表の軍功によりて
御感状　御太刀を頂戴
せられし正月十七日のおとや
佐井上枚塚にかへるの家臣
十七人ともしやの風おつるて
ても正月十七日讀開の興
行是其家督執権として
けふの加え席みて
幡摘を文臺服やむめの花

えり志ゝ隣嗜あてゝ人の
句を祝ひとりふくけし

夜光る梅のつぼみや貝の玉

但し其役守りの西行りたるよ
月侍りてゆひぬ玉葉云ふ
御梅や古饗るとて

外様と手向の梅を拵へり

元禄壬辰二月九日
聖廟八百年御忌
蕙戸御社頭法楽連俳合
興行一座

梅松やあつむる数も八百所

氷肌玉骨とこのや

丘隅

音なし花の名にも梅の皮

久松粛山亭にて

梅さく起岩の星乃匂ひあれ

百人の中に遊ぶや周の人も

芭蕉庵をとふて

芳や十日ても同しし人も
こゝろあする菜敷人音の舟や
腕押のかほ添ふ子梅乃花
篇木はなくいた是なやこの梅
芳の月を逆さはつ見つき

うくひすといておこせん杉狹
茶臼するあたりの隣に
鶯やかの蛇苺をはさす日山
茶杉まとめ見出せる絵ま
うくひすの曲る枝を削らん
鶯に一聲ありとし　ひろかへる
うくひすや是非なくも礼返
市隅
竹とんで鶯あそぶ竹尻岸
とひあけりや
うしと子心
雀子や何く様子の籠の紀

長嘯の記に深草の歌を
とて出ゆまりてまてあに
佛をまた見るあをなぜを
いなれや是非みりのあ
此さびくいんをむまのえと
のこしつる其所をかをはひて
去年の鳥くらんを無下に落葉つ於
正月巳巳布施の弁寸天へ
諸侯の華納
玉椿昼とみえてや布拄菴

梅津硯水會ニ
窓押やれと梅かころひぬ大家中
正月廿六日冠里公ニ侍座
菜刻ミの上手を揃る蕨ゟ家
梅本を画て
木おせるの中継とやみてつくん
十一日
お汁粉を還城楽のこゝろとかく
京清ゟ和帯みせなや二葉
漸覚春相泥とらふ切白
潮ゟけ膏薬ねりの鼻ニあれ

島のこ汲ゆよみてしかあつミ
二人しつりのうけあふ
あつミ東扇二ツをとふこてふ
百人の雪掻志らし蕎麦切
万葉志らねも朱雀の柳を
依り所ゟのかしまを
おひろこハ西の兎ニあるかゝり
とはつとも龍ニ匂へる蕎麦かな
七種や鳴ぬふ鮮の枕かと
あゝ中下読まうろし　鴫鳥
砂植の名茶も東より初わかな

渓邉双白鷺

河州八尾
娠ゑし

沖よ鷺 芹 摘 は 流りぶ

うすら氷やひつよ咲る芹の花

一羽ハかくされよ 蝶哉

石下に清な流や むすぶ硯

白魚や海苔ハ下邉の買合せ

汐干や餌あさる海の王の家

白魚て漁翁ら翁子ハ女ひ添ふ

白うきの鬠子柳ら添ひたる水

陽炎や小禄乃都ゆ咲くえ花

嘉し屋々友よ

こなさまも女房もちせん水祝

衆鼠入懐の菓をひろきて

引つ迦て払をくいある鼠かな

寶引小蝸牛の角をかくくせ

帯せぬて神代おしま 踏舞宴

雑俳人揃の神をあつて七人

句を喜ぶ海中よ大黒戻きれ

此あつせらて桜ひとつ鶯逃り

年頭は櫻の口遊く小推りふ

三月正當三十日

山吹も柳の糸のはらみかな
梟よおもたき目暁や朧月
禮しや太神宮へ一つゝ
清露や天氣定めて樫下

畫成

格枝繪馬合す

こゝし斯蛍ふえから稲荷山

禁園ヲ破りて暇ヲ玉ハルこ

破や見憎い鎖放ち乃ゝ紀
やよ入やそれなれいかたの是ちる星

須らしきろそ

故赤穗城主浅野氏府監長矩ノ舊臣大石内藏之助等四十六人同志異体報亡君之讐今茲二月四日官裁下令一時伏双齊屍

万世のためつり黄香掛ひるゝし
肺肝をつらぬく

うぐひすは芥子酢ハかなゝかり

冨森春帆大高子葉神崎竹平
これらの名ハ焦尾琴にも載り
咲にけるし

黒印半面美人の字を彫て琴形
の中ニ備ヘタルをはじめて冠里公の
再呼の御巻ニ押弘め侍りて

春の月琴の手あり書はじめ

悼後立志

背くれ初音三井寺受れ去　初音八女之

題水

ちく乃河まろ水や鮫の髄

画賛

拾得の風巾みろむや玉箒

宗子けふ帰る水くめる寺

寺納

金枡や児書よりても稲荷山

藪入や下ゝあるうや筝

中子入や牛合路して大原を

元禄丙子のとしむ月末つかた
海府より出山するみあそひ侍り
畠中の梅のわつかんまく六分咲
ある蛙のかはつをみつけて賤乃
草茎なすへしとおもう侍る

草茎も包む莢も雪あるふ

瑞牛豆くとはかり　柳一らふ

御忌

人の世やのどかある日濃ふる林

本多総州公にて

春花寒や芽ばの鞭の跡ハらう

浅草川渡舟

河上ハ柳かんめう百千鳥

柳〆ハ鼓もうつす霧も淡

欄干や柳の曲をつゞみ　祖

市川才牛追善

一子九歳名残つき給ふ

塗箔の兄ハあふらや雛の色

菜苑

黒松麻てしこそあへぬり土筆

春雨やひきのめハ柏ほどし

年始あいさつ
闇の夜のちりかゝるハ梅の袖
於三十三間堂
花桜やきのふの箭見ても来けり

青柳に燈籠つるす夕まくれ也
柳上譲の図に
ゆき海に譲の親見んと柳ハ
撫城の賢ならは柳にも
春雨
鍵ゝ立てつなく峠の雨寒し
此雨ハ河てくらし日河ハ
二月十五日上京発足
西行の死出路を旅のはしめ哉
源氏武士ハ唯乃る彼岸哉

佛若に大晦日ニ入滅ありて
いふ仏ともしらやくす
へきり尓宗生のゆめ見ハ
往生とふのそのなりし
佛とふれくるの花ニ目於て
山里の名とあつしや佐備居
初年の盆也見ぬやうり雖為賣
とてふ里邑大なふの里ひらり
野嵐のこれをみれんつく
竹のもや柳を冕ね落のとう
梅のくやけ一すしをふきおとう

二月十七日京驛
男生の脇都のちまへんて参ん
おほらとふ松の黒さよ月あかれ
彰義の路とる郡の居を問て
一揃よ玉子を送り人々
いつてや宵の玉升十也よむ
南都ニ何をふ　雨
傘や薪の枝の河原ともを

無車馬喧
夕日新町中ニあむこて京

見獅子舎有感
すゞしさや獅子ハ獣の君にして
蝶とふや猿をよのひとゑ丞画
葉眉ふ分をへしそしこてか
釈菜
聖堂にこはぬく蝶の枝に
百とせハねむる薬乃こてふ
柳燕圖
ひるゐに巻をうこらに柳紅
茶の花ハ春に葉しもて 里蒬
画 はん
蕪やかゝるく巣を虫凧巾

背子うらゝかに海よつゝめら
海面の松をけりあとる津ハめ介
傘にも燕が さゝる ぬきし燕
朧やひそうつれとも文 日之坊
うつしても新らく雛の誰か方
人らとし雛をもらむる犬の壺
角田川にて
あれもめ鳥さそ見るら雛乃毛
海苔すゝく水の名字すめ 都鳥
小田のへす猿を 桂やのくみ岸

夜川にかゝる江に星の数
ちんまり蝦にそゝる涸に
帆柱のせみよりおろす雀に
苗代や夜は江に隠る鮫かれ
吹おろし俵子流す小椋に
景政か片目をひらく田蝶かな
みれ波のゝ作る子
孫とも乃蚕やしおよ日向に
春雨や菜の実に酔ふの尾張

治徳岩城ゟ遷宿して
鎌倉の旧跡を眺むる
よしの宿にて小
松島や嵩らに沖とも此席
南村千調佐藤くれ中
初春や龍足を喜く海乃志　貝
富士乃峰千のそまれ作り
三帆舟ハ塩屋になる浦に
少将なるやしる梅乃小枝に
賤の家なを案なれ人くれ中
句をすゝめけるつゐて
梅の先をとりてや賤のやとかれ

いせの津を通る
久けとふくれり

馬より出る子を御門や傀儡師

傀儡師阿波の鳴戸をもし小舞人

四壁園

このけりふくねても動くや虎の耳
三州小酒井村釣音女納

如是論や鼻も一つに春日和

或ものに称ら比丘尼を
獅子のぬけらかしなり
住物乃除くいふきしみや
されし五つの徳を感じ

能睡 煖なる所嗅出してねふる
能忘 なり一度七年かふきし恩の雨
能捕 静なると鼠の味を向ては
能狂 陽炎と志らすに狂ふ心
能眺 蝶のあるあるとあるし花心

自得

蝶をくはへて子猫を舐る　ゆらふ

足跡をつまこふ猫や雪の中し
猫の子のくんづほぐれつ胡蝶かな

市間喧
流行本宜の手ならう是非　雨蛙

古郷酔帰の女房の内にて
かひあはせん
春の夜の女とハ家んすかな

宰府参詣の舟中にて
菅家の御乃小城ま子角古きかり

醴に桃李の詞へ　純白し
鶯の柳にはさまく　弟一毛か

王子曲水にまねかれて
我吾を烏帽子にさせん岩にて
曙やさして桃花の鶯の声
都ハそよ桃や要舞妓の脇踊

待ミ来て雛の宝や延喜銭
見ての気や盗まぬ雛ハ松浦舟
おはしけに木兎もあり雛祭

雛やさゝ甚婆にまかしおろのけ
三月四日をかゝりけり
ひゝなや其佐野の日より雪の袖
版のひな清水坂を一目みせ
打菓子や井筒にかゝて雛のつげ
雛の女房宮腹しにあしげる

永代島八幡宮奉納

汐干せよさらで来れ次郎貝
觀音も此月を踏ん汐干かな
絶國の網引つきて汐干かな

第酌

まとこのしや雛に第して 小盃
曲ありけの氣違ハ茶碗かな
蕪子にかまけし人形也桃の花
曲水や筧流るゝ宿なしそ

錦よりて祝ひおさりけり雛の良
ふり云を雛に焼め乳の母
雛くれ世人を御殿の棧敷かな
緑豆（やへなり）の眼も白し 桃の眉

須磨ハよ江にあむやより合
　貝ぞろへを売りて行に
蛤のしかもはさむか　玉柳

此露ハあつさへ御遊義の比
たちんけのるなきことよし
御あそび釼抱の御書とも
はなしけるに
勝負は何の茶わんも山桜
　露沾公御庭にて
深川のまるえこみん月この初桜
鐡ふかいこあれ思ふや花の庭
地鎮や如のかたい松もあり
花ちん江母につれられ盲児
いさしらぬ小町か姉の名はしらぬ

黒谷にて
万日の人もちらすや遅桜
仁和寺
れおつ戸のやとりをかへし桜かな
上野にて
添師で寵臣らんまかり桜かな
妙鏡坊より花笠ばかし
丈六に湯て桜にも佛かな
花中尋友
饅頭で人をとらまる山桜

一亀を祝上にと招れて
初桜天狗のつらに多こせん
友猿の友きくれすな花衣
三月廿日含香亭にて
山にて小佛供し
佛近所や花のこちらはみなゆるを ちかこ
門柳華をはらふか柳かし
うらむれず嘯
佛用よりて児りへすか花の宿
鋳屋善 奴の膝をとりてのこ
なまらぬ心まである酒を呑て
傀儡の鼓うつなる兼つんかな

表中京
画上右西湖

石河氏宜雨公の山荘ニ
美景をあつめて四方ニ四ケ
の情をもてなし ぬへるふ

二節のたゝハ角豆ヶ山にくゝり
護国寺 あそふ明
こゝしてむらさきて
白雲やもよ旅行 龍ハ嵯峨
立花をあらはせし
ほりほりく主にわん人に花衣
京よりくらん [illegible]まよりて 西
花ニ遊て馳走よらん 都人
霞よとすれ棒つき思ふもの山

山桜[illegible]を放し 梢 西[illegible]
もあれて人の[illegible]はつつらん
花[illegible]物くらて 女ハ[illegible]

侍座

花[illegible]ては 表書院て月代
[illegible]に来て 都ハ幕の盛なり
萩盛[illegible]て[illegible]るらはし 夫婦ト
[illegible]盛ふく へ踏[illegible]る人[illegible]
世[illegible]世五年己[illegible]の如とも

目黒松隣堂にて

浮世床を禁りに咲ぬ山比かな

於東叡山　三句

小坊主や松にかくれて山桜

八重も乃山はさくらや一泥て

人も人を恋の楽やたふよる

苦胆山かくして

明星や桜たるぬ山かつら

折かり殺生偸盗あるも

何すくしと花に五戒の桜かな

行雲云重き佛陀の花を詠り

けるとしかてこの月の化を

花をほん使君の趣向月を紹

好子万三てを作して

その毛もよあるきしちかくや小盃

酒のたちふよさむゝ花を

しかむ人

わか郎に漬味みせよし塩桜

惜花不掃地

家奴花もふ散露ゆるしかり

雨村

さくらちる降生五ヶ八ではれは

上野清水堂にて

詣りても盛の花ならト

ちる花や路次をへらる足の心

日輪まの傍と逆音のうく
以外の興し部

むまの酒傍とも侘ん塩介

一食千金とうや

津むの何五両せん花くら　鯛

辛未の春上野にあそびける日
门主薨御のよしをきゝて世上
一時に愁眉ひそめしかば

其弥生その二日そや　山はくら

花も詣てこのさめく喧嘩也　貫

上野御

ゆるり徒士らん立る此乃花かな

尋花

梅木屋の亭主留守也むしかと
傍春と清水に遊びて

車まて花らんをりや　東山

茶笠をもたせて凧合ん人合　誰

酒をもたせ妻を妾のむかんふ

此雨は芥らんぬ人や　家乃豆

王維山水
寸馬豆人

永代寺池邊

池を呑ゝ大江へ入あひ花の紅

甫盛ちしめて上京す

花で濃伊賀を仕まへて裏鞍

大悲心院の花をみんとて

灌頂の閣よりもて桜か

茶もらひにけり咲き替を山桜

おもそも花の間乃せられ

照る盛や鐙にのこる初ざくら

跡ふの山る

桜角

海棠の花のうつゝや縁月

小名居ハたちまるの稀らつし山

月雪よ山依もの来越よし

亦是より木蓮一ぺんちつし不

蔵咲て襟をふ日をかぞへけり

旦夕ちちしねもしむるはし泳

私称や龍かる藤の柳

心さす所捨たんちは岩つゝじ

よれよるん秘石の五徳や蔵ちか

白蔵を酢みそにつゝみ不霜執

洗竹川音遥

親の笑ハ山彦乃衛や志らぬか

錦みも薮の風を勝へし

三月十二日含英亭の花
まし百五十余旅う人際
出る下遊て後りて

植足ふ三切の供や山吹く

月しく入相

けしと花乃気おや節扇

秋航 庭せりし哉りしふ

色そ九や薮植うし扇元

龍樹菩薩の禅陀伽王子録して
貪欲をいましめ給ふ事あらんとし
有癩人近猛火雖得暖增
苦の文のこゝろを

雁癩のいゆる時得しは涼かり

广新出歌よ
一目之羅不能得鳥得鳥之羅
唯是一目ほ文のこゝろを

なるやらて恐しし猫の行ホド

意馬心猿の解

立馬の日を猿は繫心

藤こ白くあつたかれ
よりせる人しらの
拙ろれりせ色

雑司ヶ谷にて

山里ハ人をかくれの花見かな

四の三哺公侍従になりて
寛永二年三月廿七日に
京使にしもちぬかを祝して

若葉や廿七人茶屋より

芭蕉の自画十三懐周之讃

師の坊乃十年忘れし　柳隠

花守やあやなき事も木陰寄

背中乃面起すや松くおれ

淀舟や大もこゑもし　龍紅

夜遠望けつるるや　子鯤

官城

歴々や下戸の扨かし　游吟

河東

川むらひらき西へ〳〵　子鯤

鶯啼やけあろうちを　郭公

吮の氷雨をちそ哉　郭公

百間長屋にて
降る人のはらうんらう下水ぞ
に銀一二の橋なおはなしに
阮咸の三味線志り降る
　佐嘉
降るあめにつき傘を買せたり
　赤折山
夜更て来け揉あいた鼓館
ともしの用こゝ月に降る
寮坊主のまゝ八麻しおもむきに

宰府古納
おもてすめる居くも越になり
　林中不賣薪
せまきくや山降る町をつき
法り江そりよ村まて
ゆふ山市場の日陰や降る
焚る五加のおくを伴つきに
　曲絶人不見
咲の叉吐ハなあり
降るわれや嵐にひかれきん　新ム

子ともらに枕もかさす時鳥

母におくれ侍りてことしの
あさゆめのミ見る時ん
菖蒲に母をしのふか郭公

根岸につきを付して
ありしいけとて
子の間妹よひくせおもひきす

森魚まて

蛤乃やりきて鳴よ月とせきす
それよりして根岸鳥や郭公
五滴を硯に寄之ほとゝきに

白文

人の夏の四月にかけよ郭公
時鳥茄子も三ツの小絵抄
うけもちあり人のきそうて
ねらりやされて
郭公懐をあゆのとすめなり
身の消て瞬ぬけ風呂や郭公
六阿弥陀かけて鳴らん子規

淺井ち樹下

虫つけぬ銀杏によらん郭公
葉まみて画れぬ桜や郭公
ちとく平はらふ雨の　桃蔵

時なる人を馳走に寝ぬ夜かな
目の上に目をつくへや　子規

夢昼

汝ハ目に移光を従へ新云
姉か峰の野丈忠功孝心を
さうしめされて禄をぬけを
さるるませずてきて作るを
起てまけ此河る市芸木記

佛さへこの世百ふくらしさま
志つてやけふハ生れもらん
癸餘や母にきらせて仏生会

風光別我苦吟身

大酒に起てものうき袷かな
鄙俗にまぬさく着や衣更
一つとつに袷に風や黒木売

卯月八日母におくれて
身にそふて衣かへうき月哉

慈母墓

花ぬすやしるへする蝶哉
上行する
灌仏や捨子則ちその児

花紫白合よ

年寄しはなの雲の盛かな

殿つくり並て新し　桐の花

夕のまなさき

うかれめや異見に凋む夕牡丹

いつしか花あかれたるその牡丹哉

河内観心寺

楠の讃ぬかれし　あはれ哉

範節子を

あらき火の燒まふる　牡丹哉

雨意　艶士にかて、

ハやきうつゝに知るやわらん哉

池田の御菓子宥柏の礼状を
あつめて集あめる年

さしたりし角に火ともしたる草

下流卯月廿中の一日

隠岐殿のりへをつんでやせ燒山

為叟　百里　全阿　甫盤号
上京の節　三十三日の吟席之

寛永開元　奉節使
清作集の人への寄にて

とりる氣て佯せしと誰か夜々へ

屏風に茂房一位すゝるの風
迷ひ子れ二位よゐくし時雨

長崎屋深れら家に紅毛来
貢の和く奇なりとして
桐のもと新渡の鸚鵡　不言

愛娘子
鶏啼て玉子吸散ハあくぬけり

席令初めて上京に餞
涼しさも都のそくや　連也金

揚州羅

護国寺にあそぶ
水漬に涓てちるや　杜友
ちゞつゝさ露く乱ハ二河伝ても
紫の蝶も何りゆきつゝさ
盆すのけ雨に提来ぬ　杜友

寺納
こゝろ乱ゝ縁やうけて　杜友

田家
早乙女に足何ゝりき嫌ひさら
汁鍋に笠のつくや早苗取

木賀入湯のころ

きそしとや石菖ゆかるるの門

袖裏や茄よりけふ白くなる

舟哥れ均しを吹や夕あらし

卯の花や蛎ふる山の夜乃くれ

よのなかやいつまでの御所の加茂詣

寄幻町　長志

老僧の筍をかむふるまひ哉

筆ら竹よりちくす太河らん

竹の屁をも打芦啼や五月闇

膝下無寸鉄

筆や太山ゆかめ鎗の鞘

素堂居

艸むらハ皆喰虫のそよの艸

楓子居

茛艸や家かくれて御用芦

夜番や橋臺見えて向ひ通り

目囲の罡の榎や築ぱらひ

吐蛇瀦のおいむるよ自る海水

桝子つれて一里ハ乗り岡の松

畫兵

争たぬ虎れ耳やくらうすき

戸塚驛にて

讃岐の訛ハ巳日のと者か
帆をおろす舟ハ讃ゟくれ
夕焼や本の肩まて中なる
志らすり通る的

世中を志ら済てし小諸うた
飯鮨の鰹ありつ女都か

和之謡ま

伊せまても松魚あるや　酒定
とよろきの名ハ昔まてらづハか

呈原江公餞

簟木や人まへさつる五月雨
以こよれや是まても舟を通る人
旅ぬく田子のもすそや五月雨
悦こふれや富士の煙乃き漂へ
なりまかや傘ふはるゝ人形
さくられる酒勾下なる都茄子
巌岩院殿乃大法るりを
東叡山ま移こまル
なりまのそこも体むり法の声

市譯吟

高舟とかる鰹やけの丸組

はあやめのほりもつる花ハ

公門に入時

あやめ引く時は帷子乃ころハ

淺酒を沼になしる菖かな

ほとゝきすあやめもはやめ

かけぬる宿ぞあやし

やとしかほゝぬ　佐市し

新へそくよありと伊せ大輔

家のしらおうへく作る

菖蒲　蛙のつらは　あやめ人

此夜や通さらくさし白鉢

二色の男きやまれて村との

古印との　こゝろとの書付を

その人形の風俗をしるす

小さき菊を以人形ハなし

新むし坊主ちまや花菖

五月ころ見しまはせる

家見て

屋根菖と並てかける菖哉

あらしぬる女の塔のほとりて

かこうしさらし

山笹の粽やせめて湯なく　さゝ

竹のこや　ひつとこ子の　ころひ　粽

本たし夕へを志めて菖艸

五月十三日

雨空や帝も酔日乃人あつめ

藤のゑや金魚まゐるれる篭

酒蒲

菖のもの酒典童子も二面

青嵐といふ説を

海松かふ杉の嵐や和歌山

蝙蝠の尿もこぼるれあやめ草

交代の葉守の神や初柏

疱瘡は何といふあそ不機嫌か

緑槐 高處

あつさや笛に蟬せ 十文字

けふからハ酒の肴に遣せたり

德兵衛やむかしの角ハ路牛

いかめてや什に生まうれたる

文七にかまらぬ庭のちいつる也

河原町にて

妻ヶ家かなよよかなか音やらん

宇治にて

川くまや水に二重のかゝる垣

うつせミの絵にも
夏虫の碁にこそわかるゝ命かな
谷仲
風ふかぬ森のしづくや人かな
僧正君
僧しらずは貝ふく僧よんで鶯
下やミや蛙根性のふくれ声
露江公淄池の高閣に
たちしめて涼を挽んとせし
常也とおもはせあそびけるに
夏山は我が御筆となる安休

宇都宮入道
蓮生ハ夏のよき日を出掛ひ
樺脱に竹をゆかりての鎧かな
よめりせし時の桜か土用干し
掛人や木枡にかけて土用干し
浴衣着て礼貫に袖も引
狙公 淄池にて
礼むいて猿にくらするはつさかな
氷殿よりハかき花のしづくかな
手扇やうつむけてある箸小舟
秋の夜ハ水もまてに流れかり

亀毛に餞
花の陰笠八重とり花まくら

破扇の図
維光か家架く捨し扇哉
烏飛鉢ハ何ふきのはつ紅
紅ようちふのふさ乃白於
せミ帰や木のあかしる園かり
隣らけ木にくむやせミの声
竹のせミ竹らす志ほる時哉
おらてやせミよ雀も蛙之社

白雨や内侍かゝく物語り
雨中白雨といふ題
蓮よ香もあらり子腥し
白雨やもりもとむれし嵐の子
ゆふすゝ化に営あつく帰る寺
夕立よひとりかへる女かな
牛鳴云遠の秋蔭にて
雨乞するものあかりけり
夕立や田を見めくりの秋なかな
翌日雨少なし
舟中吟
はくらにけ錦帳帰出て里を拝し

うらひすこのく

西行と南花村の人は小谷
芋めでた畑をつらむし来れ
ほんまくの緑は来わの他ふ
土用のいりとさ日の吹こし
籠なす茄子うり出る夕か

鳥山へ古るむくる

まだ柳やつらむ雅ある坂の色は
ゆふのみや白き鶏垣根より
野焼ハ夕へをまちぬ世事かな
麻村や家をへよる糸車

旅人の隠者参宮しけるに
はなむけすとて
夏の夜を吉次か冠者に似たる
ゐの故人 薬如に病気の記なり

生死去来

鳥は如くいつくより暮の声

捕虎　東坡

七ツ色の如にうつむや足疾鬼
如猫にゆめのうち樹かるゝ
蚊をやく風塵狐か園の私犯
うかり火や如をつる方に老猫

更闌

石灯篭の影に清く精舟か

いまけさはずずくどうと
うちちんぶされからさめては

切れる夢ハ誠ゟ蚤の跡

旅店

飛子の雪蝿ハ酒屋に降りけり

あるん大なるへくへをニかけ
剥て盃としおハ蛇さしのまし
肉ハ氷に塗てかなロにむら流
をらせてゐるとのをむ

清ら純李ハ白き面にうつりけり

形目鼻なきさめんのやうし

浅草河蔵て吟涼

呼ん坂舟なれとすそ行く三ツ

川涼こ影に泥なる泳ゥなか

涼こつむ安房や上総に舟ハ涼

すゞしさや帆に融泥のちりと散

舟暑し照られのそく園の影

千人かくまを欄干や橋ゆらん

涼しさや先あ蒔野の流星

饌退之捨酒吟あそ

酒あり江舟をらしやむ涼あ哉

こゝろ

此碑ては江を哀れも蛍哉

牛御前

是や皆雨を呼人のすゞみ

橋上休老と云題

牛泥む老の歯くさや橋涼し

艀を玉子て売くすゞみ舟

海を見て涼む角あり鬼瓦

餞　久松粛山

峯を出し帆並ぶやゆふ下涼

人の子をとめて

涼しいら寐てつむり刺ゆめ心

画讃

大黒涼し布袋の揺ゆく所

日枝にむかひ大明神を

十八の明神つまに涼み哉

河原にて

昼を牛にてすゞみ車哉

片松にくさ風あり庭すゞみ

勘当の月夜をかし　涼之朴

暑字　けふころにて

むら雨の末跡に通る暑さかな

呈餞　露江丛

借りきの鞘の暑さや閣の松

人まつ暑れ影なし　端涼

自棄

きつね寄る野起昼寝夕陰

五月十日雷雨家中の
茶店中やどりして

町店より御出時て　鮎の盖

住吉にて西鶴は矢数俳諧
せし時に見えたりけるを
譲の字二万句の幟あり給ひ

七十余の老翁にてありつて世に
もてあそぶ俳事に追
善の句を乞けるその老翁の
いまそかりける時路さしかかん
ほめんとおもひしに世にも
かかる長寿なりしに古来稀
なる事をこそおもふやさしく
ゆかしさかれを

六尺も力おとしや　　西

村田恵庵うらみし

并この年秋弁江の或社に迎
乞ゆかある霊仏霊神あつちに
なりて行しゆて興廢の御
噺記あらしたるかしよきみ
時の開帳ふはじのの御てらかし
れたるられて官吏歌らのさ
くひや　暑をさかりに霍
乱出氣のはらうなおく據乃
さくにゆみてはらふ行程の
遠近をさ過番てらまて

海ひらそ幽き振舞水の下向さ
　祇園和尚らしやに

夕顔よあさら佐さつけし賣名号

昼顔は宋操涼むふ也
放翁の句を繪にかゝせて讃
のそらむ〻くるその繪ハ文良
乃ろる翁書しつるとたゝい
得らぬへ自句を乍給ふ

夕顔や一日乃こすゑの宿

　題欧陽公賦

蝿の音北兄子祭あら子し竹さむ

　画讃

蜩の〻小雅とふいそし車百合

手折肩とこつ王　くゑ遊・友日干

米中・君

魚市涼宵

楊貴妃の夜ハ活たる鯉かな
七月七日霊愛を感して
東湖の蘇子天は詩作る子
出典華並に欺かれてし蓮かな
荷切や下る道し切た茎角
　其仙貫之の古画は
冠ても指をそふめり其乃汗
　吉凡七妻ありとて
風かよふ是や世を家の池
上下と裸の客縁　余瑳舟

あ満佛字より浅さう風書
　とうありさんせよとあり
象や扇の奴を垣根かな
　とかきて芳うふらさまして
　まづ軍略とうらら扉中
　さんをもまうせの再ハやう達て
涼風やる一夜すまく女房し
　鬼のやうある法師ちのくへ
　くる事て瓜組釈はとゝめれ
　是例して仮りのりよそ
　介抱せし幽漱生のひて仙よ
　いきしみけるも落ほれしくへきな
兼葉ぬも食養惟や風留
兵守や桂の生例さへてより

越の人の土産をめそて
光廣のうたをかけし合絵り
謡人もんすゑてしを袖て掛
元角田川牛田とらふ所まて
いそのゝ清水こゝろよきお檜
般舟餝よ帰ゑりて
貫之の銘のすゝりにかまへ
たるんけの一句を扇子にきて
生の松かのうしをまた
木曽ねとや涼味をしをきり
市にすゑて
虫をむと枯木の小町 千ねより